

# 豊干

時	所	シテ
冬	支那	ツレ
		寒山
		ワキ
		ツレ
		拾得
		寒山寺の僧

「これは唐土寒山寺より出でたる僧にて候。我未だ天台の国清寺を見ず候程に。唯今思ひ立ち国清寺へと急ぎ候。」

道行  
「月は落ち寒鴉枯木におとづれて。／＼。冷じかりし楓橋を夜深くたどり行く末の。江村の漁火もほのかにて客船に至り山を越え。朝／＼の数積る。夕の空は物凄や。／＼。」

シテサシ  
「面白や花あつて客を迎ふるに似たり。」

ツレ  
「鳥啼いて人を呼ぶが如し。」

二人  
「實に石上に詩を題して。緑苔を払ふ時とかや。」

地  
「米汁を手に携へて。／＼。花落の塵に交り。白河の波に裳を濡し。万民に面をさらすも恨ならず。」  
法の為なれば身を捨つる。吹く風の寒き山とて入る月に。指をさしても留め難きはつながぬ月日なりけりや／＼。」

ワキ詞  
「如何にこれなる人々に尋ね申すべき事の候。」

シテ  
「此方の事にて候か。何事にて候ぞ。

ワキ  
「天台の国清寺とは此所を申し候か。

シテ  
「さん候。これこそ天台の国清寺にて候へ。扱御僧  
はいづくより來り給ひて候ぞ。

ワキ  
「これは寒山寺より出でたる僧にて候。

シテ  
「何と御僧は寒山寺より御出でと候や。それにつき  
思ひ出したる事の候。古此所に寒山拾得と申せし  
人の。住み給ひたる所なり。

ワキ  
「実に／＼これは貧士風狂の士として。

シテ  
「常の徒にこれをおすべきにあらず。

地  
「布儒又零落し。／＼。面貌孤衰して膚ぎやう骨と  
衰へ。或時は樺皮を冠とし。又或時は大なる木履  
をはきて風狂の。姿と見れど心は仏意に帰する人  
とかや／＼。

ワキ詞  
「如何に申し上げ候。豊干禪師の旧院はいづくの程  
にて候ぞ。

「豊干禪師の旧院は経蔵の後なり。今は寂として人

なし。さりながら此方へ御入り候へ教へ申さう。

これこそ豊干禪師の旧院にて候へ。

ワキ 「とてもの事に豊干禪師の謂委しく御物語り候へ。

クリ地 「扱も豊干禪師と申すは。天台の国清寺に帰す。髪を切つて肩に等し。布裘又像を見す。

サシシテ 「人あつて借問すれば。隨時の二字を答へて他の語なし。

地 「楽んで独穀を碓舂き。則ち菜炊にこれをそふ。

シテ 「曾て虎に乗じて松門に入れば。

地 「各衆僧を。恐懼する。

クセ 「或時豊干あまねく。山行せしに不思議やな。児の

泣く声を聞きしかば。立ち寄りて委しく端倪を問ふに舍なうして。孤来と答へ申せば。誠に哀を催し拾ひ得たりと心得。拾得と彼を名づけつゝ。豊干様々養育す。

シテ「かゝりける所に。

地「いづこより来りけん。拾得の如くなる寒山といへる童子來り。常に遊樂のたはむれの。浅からざりし有様は。喝呵大笑して言語も更に常ならず。

シテ詞「其時呂丘といつし人豊干に伺ひ。国清に今顯学の輩ありもやと問ひ給へば。寒山は文珠なり。拾得は普賢なりと答ふ。

地「呂丘此時驚きさわぎ。須臾に堂に入つてこれを礼

す。

クセ「寒山拾得は。何故に今更我をば礼し給ふぞと。問

ふに呂丘は豊干の教かくぞと語れば。

シテ「二人此時驚きて。

地「入禪の豊干こそ則ち弥陀の化現よと。云ひ捨て閑巖幽崛の内に入りにけり。誠は我は古の寒山拾得よ疑ふなと。いふかと見れば閑巖石根は雲と立ちのぼり。縫目の中に入りにけりく。

ワキ

「苔の庭に法をのべ。く。ありつる告をまたんとて。袖を片しき臥しにけりく。

後シテ

「一声の山鳥曙雲の外。虎降供して松門に入る。如何に沙門。汝貴き故により。忽ち夢中に豊干向顔をなす。同じく寒山拾得。世上の信たる事を知らせんが為。石の縫目をとく法の。仏体を顯し。

給ふべし。

ツレ二人 「石に精あり水に音あり。

シテ 「虎うそぶけば。風は大虚に渡る。

地 「像せんせつたる石嶧二つに割るれば普賢文珠顯れ給ふぞ有り難き。

ワキ

「不思議やな目のあたりなる御姿を。拝する事の貴さよと。掌を合せて如我昔所願。今者已満足。

地 「其時豊干は。虎上より。く。静におりて。菩

薩に向ひ。逆姿を顯す上は。法恩微妙の舞楽をなさんと琴瑟鐘鼓。琵琶箏和琴。笙簫篥。虚空に

舞楽を奏しけり。

「舞楽も今は時過ぎて。く。有明がたの尽きぬ名  
残。白むは東の山葛。かゝる奇特は此寺の。仏法  
王法伽藍長久五穀成就の其誓願を夢中に見せて。  
普賢文珠は。二巖に上り。豊干は忽ち弥陀と現じ。  
西方遙の雲に乘じ。飛行自在を顯し給へば菩薩も  
獅子象にのりの姿。如来も金色の光を放つて。紫  
雲の内にぞ入りにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著  
『四流対照謡曲一百番下巻』芳賀矢一訂